樹　　徳　　会

仲野　公一

はじめに

千葉大学医学部樹徳会は，もともと仏教による人間形成を目指す学生および学内外の有志の集まりであった。昭和29年に公衆衛生学の柳沢利喜雄教授を会長として，静坐会，公開講演会等の活動を再開し，少なくとも３回目の樹徳会の復活がなされた。昭和33年に学生サークルとして正式に発足したが，学生サークルとしての樹徳会の歴史を顧みると，極めて盛んに活動をしている時期と，学生がほとんどいなくなり，OBが中心になり会を切り盛りし難局を乗り切った時期が繰り返されている。熱心な学生のもとたくさんの会員が集まり活発な活動を展開する時期もあるが，その後会員がわずかになると熱心なOBが卒業後も会の運営に携わり，数年に１人現れる熱心な学生にバトンをつないで，会としての命脈がかろうじて保たれてきた。千葉大学創立135周年にあたり，これまでの樹徳会の歴史を留め直すこととする。過去の記念誌に残されている100周年までの流れの概略を辿り，特に千葉大学創立100周年以後についてまとめることとする。昭和33年以前は，会の責任者は医学部の教官であり，会長と呼称されていた。それ以降は，学生が会長となり，教官が顧問となって現在に至っている。

創立100周年までの流れ

明治年間に仏教の教えを医療現場に生かすための勉強会として発足したとされる樹徳会は，学生および学内外の有志の集まりがもともとの母体であり，千葉大学内でも極めて長い歴史を持つ会である。大正15年に樹徳会の再興が諮られた記録があり，それ以前に会として存在していたことがうかがわれる。時代ごとに影響を受けた仏教の流派は異なるが，浄土真宗や禅宗の宗教家らによる指導を受け，人間味豊かな医師としての人間形成を目指してきた。会の主体は医学部の教官であったり，医学部の学生であったりし，通常の学生サークルとは異なる面を持っていた。昭和７年には，柳沢利喜雄（昭和５年卒）らの働きにより，禅との結びつきが強まった。第二次大戦前後は，衛生学の谷川久治教授が会長となり，何とか燈を守り続けた。昭和28年に千葉大学に戻った柳沢利喜雄教授が，翌年会長を引き継いだ。当時は曹洞宗の師家を招いて修禅会（坐禅を中心に据えた合宿）を開催し，年に２～３回の公開講演会を催していた。この頃，学内外から一般参加者が多数集まった。運営には樹徳会の先輩方が集まり，大いに会を盛り上げた。昭和33年に榎本勝之（昭和34年卒）らの努力によって，学生自治会のサークルとして承認を受けた。

医療に携わる者として，人生とは畢竟何なのか，生きているとはどういうことなのか，死んだらどうなるのか，などの根源的な問題について，自分自身の納得の行く解決を求めるために，仏教ならびに東洋的文化に問題解決の端緒を探った。しかし，表面的に他から教わることや書物で知ることでは根本的な解決を得られることはなく，禅による心底からの納得が第一義と解されるようになった。当時から禅による修行を最優先として，茶道，俳句，料理等を主な活動にしている。すべての行事は，学内はもちろん，一般市民にも門戸を開いて，多数の人々が訪れている。昭和36年には，千葉大学西千葉キャンパスに，人文学部倫理学講座の白田貴郎教授を顧問とする千葉大学禅の会が誕生した。医学部生を中心とした樹徳会とその他の学部生による禅の会が，お互いの会に参加しあい，盛んに活動していた。昭和46年に農村医学教室の内田昭夫教授が顧問を引き継いだ。

昭和50年代の活動

顧問は内田昭夫教授，会長は和田二郎（昭和53年卒），近藤福雄（昭和54年卒），粒良幸正（昭和57年卒），木村直弘（昭和61年卒）と引き継がれた。

昭和46年12月に内田昭夫教授が，妻ふき氏とともに四街道の自宅を開放し，学生と寝食を共にする坐禅塾「総北五葉塾」を開設した。最初の入塾者は大友一夫（昭和46年卒）であり，その後も和田二郎，近藤福雄ら多数の樹徳会会員が入塾し，学生寮としての役割も担った。週に１日だけ宿泊する外泊塾生の制度もあり，医学部生だけではなく，看護学部生やその他の学部生も参加し，極めて強い結びつきの

中，活発な活動を続けた。内田教授が老人施設に入られた後，この施設は御好意で，「四街道坐禅塾」として一般に公開され，研修所として現在も存続している。

木更津市で眼科・東洋医学研究所を開院していた小倉重成（昭和17年卒）は，千葉大学附属病院での東洋医学公開講座を長年担当し，また，年に１回木更津の地で３泊４日の坐禅会を開催し，学生やOBの指導に当たった。医院および自宅を開放し会場とする一方で，持論の玄米と豆類による食事療法を取り入れた治療法の実践は，現代医療では対応できない難病の治療に効果があった。東洋医学の教えを最後に受けたのが現呼吸器内科巽浩一郎教授（昭和54年卒）である。平成22年に退官された東洋医学講座寺澤捷年教授（昭和45年卒）は，小倉重成の甥であり，昭和40年代前半の樹徳会中興の祖と言われた人物であった。

この頃から極めて学生サークルらしい運営が行われるようになった。昼休みの公開静坐会，月１回の同窓会館で実施された土日一泊静坐会，年に数回の修禅会，坐禅会，観話会，茶会等が行われ，多くの人が東洋的文化に触れ，仏教の機縁に触れる機会を持った。

毎年４月に開催される学生自治会主催の医学部サークル紹介で，木村直弘が登壇して行う歓誘演説「君は最高にうまいラーメンを食ったことがあるか」は，新入生の度肝を抜く名演説で，樹徳会の名を知らしめるには十分な内容であった。11月に開催される亥鼻祭では，例年サークル会館の部室でお茶会「喫茶去」を開催した。

昭和60年以後の10年間

樹徳会の顧問は平成５年からは，歯科口腔外科の佐藤研一教授，平成８年は精神科の佐藤甫夫教授，平成９年から耳鼻咽喉科の仲野公一講師と引き継がれた。

会長は仲野公一（昭和63年卒），坂下美彦（平成３年卒），今井直樹（平成３年卒）と引き継がれた。

主な活動は，週１回の部会，週５回の早朝静坐会，６月の新人歓迎静坐会，８月の他大学と共催で実施した夏季学生修禅会，夏合宿，亥鼻祭でのお茶会・静坐会，12月のOB会，３月の追い出し静坐会等であった。毎朝７時からの早朝静坐会では，部室・階段の清掃の後，打ち水をして皆で45分間の坐禅をした。この会には，医学部売店の今井さんも参加され，その他の一般参加者も時折見られた。静坐の後にはお茶会，朝粥会が開催され，その後授業に向かう熱心な学生が多数参加した。週に１回の部会では，17：30からの坐禅，読書会，食事会をサークル会館の部室で開催した。ときどきOBと共に居酒屋へ繰り出し，人生如何に生くべきかについて，とことん議論しあった。千葉大学人文学部名誉教授白田貴郎先生の著書「東洋的無」の読書会は半年間にわたり継続され，その終了記念に著者の白田先生にお出で頂き，昭和62年２月に同窓会館で盛大な読書会を開催した。その折に先生から示された「立身行道」のお言葉は，医師としてしっかりと身を立てた上で，禅の修行を通して一生人間形成に努めるよう策励され，皆の座右の銘となった。夏季休暇中には，千葉大学樹徳会，禅の会だけではなく，同様の学生サークルである中央大学五葉会，早稲田大学清風会と共催で夏季学生修禅会を開催した。医学部生の多い千葉大，法学部生が中心の中央大，教育関係の学生が多い早稲田大と多様なメンバーが集い，禅の修行を通してお互いを理解しあい，医学部内では経験できない多様な文化にも接する機会が持てた。卒業後には，それらのOBはそれぞれ医師，法曹関係者，教育者として世に出ていき，その後のつながりは極めて密で，仕事上の問題にも大いに力を貸してもらえ，学生時代の御縁に感謝すること大である。その他，北海道大学絶学会，熊本大学五葉会，岐阜教育大学禅の会，名古屋大学にも禅の会が新たに出来て，夏季学生修禅会に参加するサークルが全国から集まるようになった。学部は異なるが，全国に禅を生活の基盤に据え，勉学に仕事に打ち込んでいる仲間が多数いることは本当に心強いことである。

看護学部の女性会員を主に，「有楽流」茶道の稽古も熱心に行われた。禅の会のOB佐藤米子（教育学部昭和44年卒，有楽流師範佐藤妙水）による武家流の作法「有楽流」の茶道が伝授され，牧田淑美（看護学部昭和58年卒），曽我恵子（看護学部昭和63年卒）等が，熱心に稽古に参加した。有楽流は，織田信長の実弟織田有楽斎が始めた流派で，簡潔・合理性をモットーとする茶道であり，忙しい日常臨床の中にも一服の抹茶を頂く心の余裕と，その直後に臨床に没頭する切り替えの速さを身につけるには最適な流派と思われる。

禅の会に在籍する文学部の学生を中心として，俳句会も開催された。同窓会館で開催された平成２年12月の徹宵静坐会後の俳句会で，原田淳（法経学部平成５年卒）作「水滴の　窓越しに見る　オリオン座」

は名句として永く会員の間に評判であった。

各地のOBを訪ねての合宿静坐会も数回開催された。平成２年には，禅の会のOB小林孝年（工学部昭和49年卒）の計らいで，熱海海岸の名刹「長谷観音」で２泊３日の合宿を開催した。また，平成３年および４年には栃木の仲野公一の実家で合宿を開催した。平成３年の俳句会の第一席が仲野公一の「この街に　法燈ともさん　一炷香」であった。

昭和61年11月のOB会一泊静坐会は，柳沢利喜雄名誉教授，現在の法医学教室の岩瀬博太郎教授の御尊父岩瀬秀一（昭和35年卒），東京女子医大内科教授林直諒（昭和38年卒），富山医科薬科大和漢診療部教授の寺澤捷年，千葉県リハビリセンター精神科部長太田東吾（昭和43年卒）等が参加し，盛会であった。会の終了に当たり，樹徳会の末永い活動を皆で誓い合った。

平成７年以降

平成15年から耳鼻咽喉科の岡本美孝教授が顧問を引き継がれ，現在に至っている。会長は花岡大資（平成15年卒），土合昌巳（平成23年卒）と引き継がれた。主だった医学部，看護学部の学生が卒業し，学内外の参加者も退職，高齢化で参加できなくなり，会の活動はかなり限られたものとなってきた。

平成７年のオウム真理教の事件以後，学生やその父兄から宗教的な雰囲気のあるサークルは敬遠されるようになってしまった。会員の中に，たまたま在学中に体調を崩し，卒業が遅れてしまった者がいたが，そのことが誤解を招き，樹徳会に所属していたから卒業が遅れたとの悪評が流布された。実情は全く逆で，劣等感で学業を断念した者を何とか支えて復学させ，卒業まで伴に歩んできたのである。学生有志の意見を尊重し，平成22年６月に樹徳会は休会届を提出し，現在医学部学生による活動はされていない。平成23年からは，学生自治会の理解のもと，OBによる静座会をサークル会館２階の樹徳会の部室で時折実施している。今回の創立135周年事業の一環として進んでいる新同窓会館建設の募金では，OBを中心に樹徳会に御縁のあった方たちから多額の寄付をお寄せいただいている。

千葉大学医学部内に存在する樹徳会の精神は途切れることなく，仮に学生サークルとしての命脈が一旦絶たれたとしても，過去においてそうであったように，医学部内にある学内外の有志による勉強会として，今後も活動を続けていくことには間違いない。そして，必ずや医師としての人間形成の実践を禅に求める学生が出現するときに，再度学生サークルとしての復活を遂げることを確信している。それまでの間，顧問の耳鼻咽喉科岡本美孝教授，樹徳会OB会会長柳沢健一郎（元厚生省局長），副会長近藤福雄（帝京大学病理学教授），幹事仲野公一（耳鼻咽喉科なかのクリニック院長）を中心としたメンバーで樹徳会の燈を護持していきたい。

（なかの　こういち）